

<論文>

新潟大学教育学部高田分校「芸能学科」再編の動向

—音楽教員養成に着目して—

鈴木慎一郎

The Movement of the Reorganization in NIIGATA UNIVERCITY, Faculty of Education, TAKADA Campus, Department of Performing Arts:
Focusing on Music Teacher Training
SUZUKI Shinichiro

キーワード：新潟大学教育学部高田分校，新潟第二師範学校，芸能学科，音楽教員養成
Key words: NIIGATA UNIVERCITY, Faculty of Education, TAKADA Campus, Niigata Secondly Normal School, Department of Performing Arts, Music Teacher Training

はじめに

本稿は，新潟第二師範学校から新潟大学教育学部高田分校昇格に至るまでの過程における戦前から戦後への教員養成の再編の一端を音楽教員養成に着目して明らかにすることを目的とする。

戦前の中等音楽教員養成は，東京音楽学校（現，東京芸術大学）が中核的な存在であった。私学では，武蔵野音楽学校（現，武蔵野音楽大学），東京高等音楽学院（現，国立音楽大学）でも行われ（船寄 2005，p.416），その他，東京女子高等師範学校体育科（現，お茶の水女子大学）でも音楽の免許状が取得できた（鈴木 2003，pp.58-65，2006，pp.16-24，2019，pp.212-213）。このように，戦前の音楽教員養成機関は，東京に集中していた。

初等教員養成機関であった師範学校は，新制大学昇格に伴い，中等音楽教員養成の機能も加わり，全国の各都道府県において養成が可能となる。つまり，中等音楽教員養成が地方へも拡大されたのである。とはいえ，戦後直後の混乱期とも重なり，師範学校が中等音楽教員養成を担うためには，教授陣，施設・設備等の側面において多大な困難があったかと想像できる。また，再編の形態に応じて，実情は異なったかと推察される。そこで，これまでに筆者は新制大学の再編に関して，次の5ケースに分類し，検証してきた。

- i 師範学校→単科の学芸大学
- ii 師範学校+専門学校→総合大学の学芸学部
- iii 師範学校+高等学校→総合大学の教育学部
- iv 師範学校+高等師範学校→総合大学の教育学部
- v 師範学校+帝国大学→総合大学の教育学部

新潟大学は上記のiiiの分類に該当する。本稿が新潟大学教育学部高田分校に着目した理由は主に二点ある。一点は新潟大学教育学部高田分校には，「音楽・絵画・工芸・書道・体育」の

5科から構成された「芸能学科」が設置されたことである。「芸能学科」は1959（昭和34）年度に「芸能科」、1964（昭和39）年度に「中学校教育科乙」と改称され、1965（昭和40）年度に「特別教科教員養成課程」となる。もう一点は、上越市は師範学校から新制大学、新構想大学との変遷の中で教員養成を継続的に行っている地域性が挙げられる。なお、1982（昭和57）年、新潟大学教育学部高田分校が廃止されたものの、附属学校は上越教育大学に移管された。

沿革史に関しては、『公孫樹下の五十年』（1951）、『新潟大学二十五年史総編』（1974）、『新潟大学二十五年史部局編』（1980）、『高田分校三十年史』（1981）、『公孫樹下の八十年』（1982）等と丁寧に編纂されている。また、新潟県上越音楽教育研究会からは『新潟県上越音楽教育史資料』（1967）、『新潟県上越音楽教育史料第二集』（1979）、『上越音楽教育史』（1989）が発行され、変遷を丁寧に整理されている。その他、『高田市史』（1980）、『上越市史』（2002）の中でも取り上げられている。このようなことから、新潟第二師範学校・新潟大学高田分校は、地元の教育・文化に関する中核的な存在であったことが読み取れる。しかしながら、新潟大学教育学部高田分校について本格的に論じた学術的な先行研究に関しては、皆無に近いというのが現状である。「芸能学科」は、全国唯一の組織で、戦後の教員養成において独自色があらわれていた顕著な組織である。このような独自の学科が誕生した背景には何があったのか、音楽表現と他の表現がどのように連携を図られていたのかについては、音楽教員養成史においても解明すべき課題である。

本稿では、まず新潟第二師範学校から新潟大学教育学部高田分校へ昇格する過程を概観し、「芸能学科」が誕生した背景を探る。次に「芸能学科」のカリキュラムの特徴を明らかにする。最後に音楽の施設・設備、音楽教員の推移、演奏会の状況に着目し、音楽環境の特徴を明らかにする。

1 新潟第二師範学校から新潟大学教育学部高田分校への昇格

明治初期には「高田教員、村松（又は村上）巡査」と言われたほど、上越地方には失業した旧藩士やその子女の教員志望者が多かった。そのため、高田への師範学校の誘致運動が起り、1899（明治32）年、新潟県第二師範学校が設立される。1901（明治34）年、新潟県高田師範学校と名称を変更し、1943（昭和18）年、官立の新潟第二師範学校へと昇格する。1947（昭和22）年、師団司令部跡を利用して女子部を設置し、全国にさきがけて男女共学を実施した（新潟大学1974, pp. 29-33）。なお、1943（昭和18）年の昇格の際、道府県1校のみとなることも危惧され、高田市長は文部大臣に以下の請願書を提出する（公孫同窓会1951, pp. 280-281）。ここには新潟県高田師範学校の特徴が明記されているため、紹介したい。高田市は、農耕や工業がさかんで、積雪地、城下町、軍都であることが記されている。「文化ノ進展」のためには、県庁の新潟市の他にも教育機関を分散する重要性で締めくくられている。

1、本県国民学校教員ノ養成ハ農耕ヲ中心トスル錬成ヲ重視セザルベカラズ而シテ高田市ハ田畑原野山林等ノ作業地ヲ得易ク又河川海岸ニモ近接シ居ルヲ以テ各方面ノ修練ニ適ス従来高田師範学校ハ此ノ点ニ一大特色ヲ有シ居リタルコトハ既ニ本省ニ於イテモ認め居ラルル所ト信ズ

2、本県ノ大部分ハ積雪地トシテ下越ノ一部ヲ除キテハ一年中ニ三ヶ月乃至半年間雪ニ鎖

サルルヲ以テ本県国民学校教員ハ積雪ヲ利用スル冬期体育ノ修練ヲナス必要アリ而シテ高田市ハ冬期体育指導者養成ニ最適地ナリ

3, 上越地方ハ上古ヨリ歴史ヲ有シ且近世越後国主ノ居城地タリシ所ニシテ越後国府ノ遺跡並ニ上杉謙信ノ城跡ヲ有シ教育的環境頗ル豊ナル上ニ風俗純雅人情醇厚ニシテ輕佻浮薄ノ風無ク同地方ノ中心都市タル高田市ハ教育者養成ノ最適ノ地ナリト信ス

4, 高田市ハ六十五部隊本部ヲ始メトシ二箇連隊ノ所在地ナルヲ以テ軍都ノ名アリ教育者養成ニ必須ナル軍事教育ニ関スル指導ヲ受クルニ至便タリ

5, 高田市ヲ中心トスル上越地方ニハ各種ノ工場設置セラレ工業各方面ニ研究ノ便多ク科学教育ト師範教育トヲ結合セシムルニ適ス

6, 教育機関ヲ各地ニ分散セシムルコトハ一國文化ノ進展上必要欠クベカラザル所ナリ故ニ県庁所在地ニノミ学校ヲ集中セシムルコトハ大ニ考慮ヲ要ス現ニ神奈川県、兵庫ノ如キハ一県一校ノ男子師範ニシテ県庁所在地ニ非ザル地ニ設置セラレ居ルハ設置当時ノ理由如何ニ拘ラズ上述ノ理由ニ合致スルモノト信ズ

1946(昭和21)年8月、「教育刷新委員会」が発足した。同年11月、日本国憲法が公布され、翌年5月から施行された。1946(昭和21)年12月、教育刷新委員会第17回総会では、「教員の養成は、総合大学及び単科大学において、教育学科においてこれを行うこと」という条項が採択される(寺崎1971, p.39)。1947(昭和22)年1月、文部省は、新しい学科課程の研究を促進するために、各師範学校宛に通牒「学科課程案の研究について」(発学第17号)を送る(山田1971, pp.153-156)。

1947(昭和22)年1月、東京第一師範学校において「教育大学創設準備協会全国大会」が開催される。2月には、「教育大学創設準備協会北信地区支部」が発足し、支部長として、石川師範学校長の清水暁昇が務める。副支部長には、新潟第二師範学校長の内山良男がなる。新潟第一師範学校の教員も委員に加わっていた。3月5日には、新潟第二師範学校において第1回北信地区教育大学創設準備協会支部委員会を開催し、規約や役員を決めた。3月28日には、第2回北信地区教育大学創設準備協会支部委員会が開催され、一県一校の四年制単科大学を建前とするものの、一県二校以上の設置、あるいは総合大学の一学部になることも望ましいという柔軟な方針を打ち出した(金沢大学1999, pp.287-290)。

1947(昭和22)年3月、教育基本法が公布施行され、学校教育法は3月に公布され、4月から施行された。5月、教育刷新委員会第34回総会は、下記の教員養成に関する決議を採択した(寺崎1971, p.71)。

- 一 小学校、中学校の教員は、主として次の者から採用する。
 - 1 教育者の育成を主とする学芸大学を修了又は卒業したる者。
 - 2 総合大学及び単科大学の卒業生で教員として必要な課程を履修した者。
 - 3 音楽、美術、体育、家政、職業等に関する高等専門教育機関の卒業生で、教員として必要な課程を兼修した者。
- 二 高等学校の教員は、主として大学を卒業した者から採用する。
- 三 幼稚園の教員は、大体「一」に準じて採用する。(以下、略)

1947（昭和 22）年 7 月には、「大学基準協会」が創立された（喜多村 1977, p.113）。

1946（昭和 21）年 6 月、石川県が「北陸総合大学」設置運動を開始していた。それに対抗し新潟県も、1947（昭和 22）年 6 月、「北日本総合大学」の設置を計画し、期成同盟会が発足した。新潟第一師範学校側からは、新潟の男子部を第一学芸学部、長岡の女子部を第二学芸学部とする案が提出された。一方、新潟第二師範学校側からは、「高田教育大学（仮称）」の設置を熱望していたが、下記の学芸学部案を提出した（新潟大学 1980, p. 310）。

北日本総合大学内の学芸学部案

- 一、学部名 学芸学部
- 二、学科名 文科，理科，芸能科
- 三、講座数 二四
- 四、初年度学生数 五学級二〇〇名（男女共学）

（以下，略）

ここで着目されることは、新潟第一師範学校からは出されていない芸能科が提案されていることである。

芸能学科が設置された背景について『高田市史』によると、「県教学課長堀部健一は県内の教員養成のうえで音楽・図工・体育などにすぐれた教員の不足に困っていたので、高田の伝統や環境をも考えて、芸能科を高田に特設することを示唆した」と記される（高田市史 1980, p. 749）。

1943（昭和 18）年 4 月、官立専門学校程度昇格に伴い、国民学校同様、師範学校の教科名は「国民科，教育科，理数科，実業科，家政科，体錬科，芸能科」と合科となり、「芸能科」には「音楽，書道，図画，工作」が含まれていた。高田の「芸能科」の語源は、師範学校の教科名にちなんだと考えられる。「芸能科」に体育が含まれたいきさつについては、1947（昭和 22）年 9 月に着任した体育教員の占部誠の下記の回想からうかがうことができる（新潟大学教育学部高田分校 1981, p. 67）。

その年の秋頃、第二師範の校長内山氏から新潟大学の特色ある分校として芸能科コースを設けたい、その中に体育をも含めたいと思うが如何と相談を受ける。仲々の着想と感心、数日考えた後、古代ギリシアの音楽や美術と一体化した人間形成の体育を、想を新にしてこの地に育むことは、極めて意義深いことと思うから大賛成であると答える。この時の想が後々までも去らず、この地にユニークな単科大学を作るべきだと主張した私の根底にあったのである。

このようにプラトン（B.C.427-347）の『国家』の思想が根底にあった。学校長の内山良男は、京都帝国大学大学院政治学専攻を出、1945（昭和 20）年 7 月、文部省から着任、1947（昭和 22）年 4 月、適格審査不適格となり休職、1948（昭和 23）年 5 月、適格再審査をパスし復職する。1949（昭和 24）年 5 月、佐賀大学教育学部初代学部長として転出する（公孫同窓会 1951, pp. 34-38）。女子部の新設や芸能学科の機能づくり等に優れた手腕を発揮したとされる（記念誌編集部 1982, p. 328）。

一方、1975（昭和50）年から1977（昭和52）年まで主事であった矢野孝二は次のように、北陸の芸術大学を目指していたと語る（木村1977, p.19）。

もともとは北陸の芸術大学を目指していたんです。高田は以前から美術、書道、音楽の活動が盛んな町で、文化レベルも高かった。ピアノ人口も多いですし、文化的なメッカといった面があります。

1948（昭和23）年1月、文部省は「師範学校及び青年師範学校に関する将来の措置について」の通知を出す（山田1993, p.185）。

1948（昭和23）年1月6日、北日本総合大学期成同盟が最初に計画した計画では、「法文経・理・工・農・医」の5学部案であった。それに対し、1月20日、東北軍政部の民間情報部教育部長のマーチン博士は、教員養成の学部が含まれていない点を指摘し、新たに教育学部を加えるべきであることを勧告した。これを契機に、高田、長岡、新潟との地域的対立、学部の争奪戦が白熱する。そのような状況の中、2月10日、下記の第一次案がかろうじて成立する（新潟大学1974, pp.93-95）。

新潟 医・理・人文・農
長岡 工（2年制教養学部を含む）
高田 3年制教養学部
新発田 2年制教養学部

上記の第一次案では、教員養成機関としての学部は特設しないが、教養課程を履修する機関の中で、2年制の教員養成機関を用意する。そのために高田、新発田に教養学部を設ける。この外に高田には3年制の芸能科を置く。また、4年制の教員養成のためには、新潟に設置される人文学部内に、必要な教職科目を用意するという案であった（新潟大学1980, pp.103-104）。その後6月、北日本総合大学設置内定の第一報を受けた（新潟大学1974, p.96）。

師範学校等の新制大学への転換について、文部省は1948（昭和23）年3月の師範学校長・青年師範学校長会議において、学芸大学案の他、師範学校と青年師範学校の合併を前提として以下の四案を示した（仲1969, p.428）。

- ①総合大学の一学部となる。
- ②一、二の学部をもつ大学に合併する。その際旧制高等学校と結合することが望ましい。
- ③一地域の一つの師範学校を4年制とし、他の学校は大学の前期2年を受けもち、小学校・幼稚園教員を養成する。
- ④3年制大学が認められれば、暫定的にこれに移行する。

1948（昭和23）年6月、文部省は「新制国立大学実施要項（「国立大学設置の十一原則）」で、特別の地域（北海道、東京、愛知、大阪、京都、福岡）を除き、一府県一大学とすることを発表する。さらに「各都道府県には、必ず教養及び教職に関する学部若しくは部をおく」、「新制国立大学は別科の外に当分教員養成に関して二年又は三年の修了を以て義務教育の教員

が養成される課程をおくことができる」とされた¹（寺崎 1971, pp.74-75）。これを受け、北日本総合大学は新潟大学案に切り替えられたものの、教員養成機関としての学部を持たないまま、「国立新潟大学認可申請書」が提出された。

9月6日、文部省は、教育学部のないことについて下記の要望書を新潟大学に交付する。ここでは、教育学部の設置が切望され、「文理科の関係の専門課程は含まぬ」と指摘される。（新潟大学 1980, pp. 104-105）。山崎奈々絵は「人文科学・社会科学・自然科学に関する一般教養科目・教科専門科目は教育学部でなく文理学部が担当するという案が、9月頃には文部省で検討されていた」と考察する（山崎 2017, p.144）。

- 一、文部省としては、新潟大学に教育学部の設置せられることを切望している。
- 二、教育学部には、教職課程、芸能・体育科関係及び2ヶ年課程の教員養成部が含まれる。教職課程中には、各科教授課程、教授法の講座をもつことはできるが、文理科の関係の専門課程は含まぬ。
- 三、教育学部は新たに設けられる為に、従来学部をもたなかった高田市に置くことが一応考えられるが、この学部は文理科の専門教育と密接な関係があるから、これを新潟市に置かざるを得ない。
- 四、新潟市の教育学部は、現新潟第一師範男子部か、新潟高等学校に置くがよいと思うが、新潟高等（学校）は理学部充実の為に余地がないであろう。新潟第一師男子部も人文学部があるので、狭隘の様に思ふ。そこでやむなく第一師男子部は下級2年の課程を廃して、これを新発田、長岡、高田に分ける。尤もこれは単にスペースの点からのみでなく、原則としてもこのようにしたいのである。
- 五、右の線に沿うて可及的速かに具体案を作成提出して欲しい。

上記の要望を受け、表1の通り、新潟大学設置準備委員会は、教職科目担当教官をもって構成される教育学部を設置することにした。しかし、新潟に4年制の教育学科を置くだけで、高田、新発田の教養学部案はそのまま名称変更して、「高田分校」「新発田分校」とし、長岡の家政学科、高田の芸能学科は人文学部の一学科とし、文部省の要望通りには修正しなかった。

表1 設置認可申請書における人文、教育学部

	学科名	講座名
人文学部	哲学科	哲学第一, 哲学第二
	心理学科	心理学第一, 心理学第二
	歴史学科	歴史学第一, 歴史学第二, 歴史学第三
	国文学科	国文学第一, 国文学第二
	英米文学科	英文学第一, 英文学第二, 仏蘭西文学
	独逸文学科	独逸文学第一, 独逸文学第二
	芸能学科	美学, 心理学, 外国文学, 図画第一, 図画第二, 工芸, 書道, 音楽第一, 音楽第二, 体育第一, 体育第二
社会科学部	法律学科	法律学第一, 法律学第二, 法律学第三, 政治学
	経済学科	経済学第一, 経済学第二, 経済学第三, 社会学
	家政学科	家政学

教育学部		教育学第一，同第二，同第三，同第四，同第五，同第六，同第七，同第八
------	--	-----------------------------------

出典 『新潟大学二十五年史総編』1974年，p.105から作成。

1948（昭和23）年10月，大学設置委員が1週間にわたり現地視察を行った。この結果，下記の点が指摘された（新潟大学1974，p.109）。

- ①医学部を除く各学部，特に人文学部，理学部の教授陣が弱体であること。
- ②研究用機械器具，図書不足。
- ③新発田の青年師範学校が学校としての体裁を備えていないし，教員面も弱体。
- ④一般教養は4か所に分散の予定となっているが，これは弱体の原因をなすので，1，2か所に統合する案なら認められるであろう。
- ⑤設置案はあまり地方の現状にとらわれすぎている。もっと総合大学の本質に基づいたものでなくてはならない。

その他，「人文学部内に設置を予定された芸術学科と家政学科は，教育学部に移すことが望ましい」との指示も受ける（新潟大学1980，p.106）。

11月，新潟大学設置の内定が新聞紙上に報じられ，表2のように再編された（新潟大学1974，p.110）。

表2 新潟大学の再編

戦前	戦後
新潟第一師範学校	教育学部 長岡分校
新潟第二師範学校	高田分校
新潟青年師範学校	新発田分校
新潟高等学校	人文学部 理学部
新潟医科大学	医学部
長岡工業専門学校	工学部
新潟県立農林専門学校	農学部

出典 『新潟大学二十五年史総編』1974年，p.581から作成。

12月，文部省は「新制大学推進本部」を設け（仲1969，p.403），下記の通知も行う（山田1993，p.211）。

- 一，学芸大学または学芸学部は学芸部と教育部に分け，文理学部をもつ場合は教育学部とする。
- 二，文理学部または学芸部は，人文，社会，自然の諸科学について一般教養及び専門教養を担当する。教育学部又は教育部は，教育基礎学，教育技術学，教育行政学，各科教育研究に属する諸学科について教職教養を担当する。

三、音楽、美術、家政、職業、体育の諸科は当分の間、教職教養を中心として、教育学部又は教育部にまとめる。将来においては、これらの諸学科の一般教養及び専門教育の担当講座は、文理学部又は学芸部に設けることを希望している。

新潟大学設置審議会は相当難色を示していたが、人文学部として申請した芸能学科と家政学科は、表3の通り、教育学部に加えた（新潟大学1980, p.107）。前述の通り、9月に文部省から「文理科の関係の専門課程は含まぬ」と指摘されたにもかかわらず、「教育学部」には「人文科学・社会科学・自然科学」の講座が含まれ、新潟、新発田、長岡、高田に置かれている。

表3 認可時における教育学部

	学科名	講座名	定員
教育学部	教育学科	教育第一・同第二・同第三・教育心理学第一・同第二・人文科学・社会科学・自然科学・音楽・美術・体育・家政・職業第一・同第二	新潟 180 新発田 20 長岡 255 高田 330
	芸能学科	美学・心理学・外国文学・図画第一・同第二・工芸・書道・音楽第一・同第二・体育第一・同第二	高田 50
	家政学科	家政科	長岡 15

出典 『新潟大学二十五年史総編』1974年, p.119, p.123 から作成。

1949（昭和24）年5月、国立大学設置法が制定され、6月、新潟大学が開学し、7月、新潟大学開学式が行われる。来賓として参列したGHQの係官、イーブルズ（Eelles Water Crosby, 1886-1963）は、祝辞において共産主義者を大学から追放すべきことを主張した（新潟大学1974, pp.122-127）。

1949（昭和24）年度の「教育学部規定」では、以下の通り、定められた（新潟大学1949, pp. 68-69）。

（目的）

- 一、教育学部は他の学部の協力を得て、小学校、中学校及び高等学校の教員並びにこれらの学校の校長、教育委員会の教育長及び指導主事を養成する。
- 二、教科課程は教育職員免許法の規定に準拠して、主として教育職員養成のために編成し、教職に関するものと、その基礎となるべき広く一般的な教養と教育に必要な専門的な教科目を学習させる。

（組織）

- 三、教育学部は養成の対象に応じて次の三学科をおく。
 - 1 教育学科—小学校、中学校教員養成
 - 2 芸能学科—高等学校教員養成を含む
 - 3 家政学科—高等学校教員養成を含む
- 四、教育学科はこれを前期2年と後期2年にわち、前期2年は新発田、長岡及び高田の3分校におく。
- 五、芸能学科は高田分校に、家政学科は長岡分校におく。

(以下、略)

表4 学科目別入学定員表 1949(昭和24)年度

	前期課程				後期課程
	新発田	長岡	高田	計	新潟
教育学科	200	255	330	785	300
小学校教員科	120	160	200	480	130
中学校教員科	80	95	130	305	170
社会科	15	16	17	48	27
理科	11	12	15	38	18
職業科	25	-	-	25	15
国語科	13	13	20	46	20
数学科	11	12	15	38	18
外国語科	5	7	8	20	12
音楽科	-	5	15	20	15
図画工作科	-	-	20	20	15
体育保健科	-	10	20	30	15
家庭科	-	20	-	20	15
習字科	-	-	-	-	-
芸能学科	-	-	50	50	-
音楽科	-	-	15	15	-
図画科	-	-	-	-	-
工芸科	-	-	20	20	-
書道科	-	-	-	-	-
体育保健科	-	-	15	15	-
家政学科	-	15	-	15	-
計	200	270	380	850	300

備考 一、教育学科の後期課程は新潟で行われるが、そのうち中学校教員科の職業科は新発田、家庭科は長岡、音楽科、図画工作科、体育保健科、習字科は高田で、それぞれ第3学年を修業する。二、芸能学科は高田、家政学科は長岡で修業する。

出典 『新潟大学便覧昭和24年度』1949年、pp.74-75。

表4は、学科目別入学定員表であり、芸能学科の定員は50名であった。

1949(昭和24)年5月14日、新任教授等12名を迎え、新旧教官の面識会が行われた。新任教授には、美術史の金原省吾(1888-1958)、声楽の伊藤武雄(1905-1987)、二紀会創設委員の栗原信賢(1894-1966)、書道の石橋啓十郎(1896-1993)、オリンピックに出場した斉藤兼吉(1895-1960)など、各界一流の顔ぶれがそろえられる(記念誌編集部1982, p.325)。この背景には、東京芸術大学に匹敵する教授陣にしようという意気込みがあった(記念誌編集部1982, p.338)。

1949(昭和24)年5月には、教育職員免許法、教育職員免許法施行法が公布され、同年9月、教育職員免許法施行令、11月、教育職員免許法施行規則、教育職員免許法施行法施行規則が公布された(林1971, p.292)。1954(昭和29)年1月、改正され、中学校、高等学校の場合、教科に関する科目が強化され(18→32単位)、教職に関する単位を減じた(20→14単位)(林1971, pp.346-350)。

1950（昭和25）年9月、教育刷新審議会は「優良教員の養成確保に関する対策」の建議案を総会で採択し、10月、建議した。教員養成機関の改善策として五項を挙げ、その一つに「高等学校芸能科教員養成のために適切な施設を整備し、その学生に対し学資寄与をする」が含まれる（林1971, pp.418-419）。これを受け、特別教科教員養成課程が設置される動向があった（山田1979, p.221）。1952（昭和27）年度に新設されたのは、音楽は東京芸術大学と大阪学芸大学（現、大阪教育大学）²、美術・工芸は京都学芸大学（現、京都教育大学）、書道は東京学芸大学、保健体育は東京教育大学（現、筑波大学）と金沢大学であった³。

1951（昭和26）年4月、文部省は「教育学部運営要領（案）」を出す（山田1971, pp.232-234）。

新潟大学では1959（昭和34）年度から、2年課程を廃止して4年課程のみにする際、文部省から従来の「学科」として取り扱うことは他大学との関連もあり、不相当と判断されるため、「小学校教育科、中学校教育科、芸能科、家政科」と改称する（新潟大学1980, p.334）。

文部省は1963（昭和38）年度以降、「国立大学設置法の一部を改正する法律」に基づき、省令に定められた講座以外の学科目等を省令化する作業を進めた（山田1971, pp.487-491）。これを受け、「小学校教員養成課程」、「中学校教員養成課程」が設置された。しかし、芸能科、家政科は該当する課程がなかったため、1964（昭和39）年度以降、中学校教員養成課程に組み入れられた。高田分校の教官会議においては、あくまでも芸能科を特色あるものとして位置付けてほしい気持ちが強く、芸能科の中学校教員養成課程への組み入れはやむを得ないとしても、別組織として位置付けてもらえることを念願した。1963（昭和38）年9月26日の『新潟日報』に「明年から芸能科廃止」の記事が掲載された。その記事の中で、文部省の小林大学学術局長は以下のように述べる。

芸能科が大学の特色となっている点は認めるが、内容が特別教科の教員養成と同じであり、他の国立大学との関係もありこの辺ですっきりした方がよいと思う。別に通達は出してないが幸い9月はじめに大学側との間に了解が達したのでできれば来年4月から中学教員養成課程にいれたい。

この記事为契机として、芸能科廃止に反対する運動が起きた。事態の処理に困惑した高田分校の矢野主事は、文部省と懇談した結果、以下の了解を得た（新潟大学1980, p.336）。

- (1)文部省としては、芸能科を中教科に組み入れて、一本化する方針に変わりはないが、来年度の学生募集については、すでに芸能科は中教科と異なる試験方法をとることを発表済みである点を考慮し、来年度入学生に限り芸能の履修課程を中教と別にしてもよい。
- (2)再来年以降も中教科の音・美・体については、学内の教授能力に応じ、カリキュラムの上で種々の形式があってもよい。
- (3)従来の芸能各科については、来年度以降に特設課程にするよう努力する。
- (4)来年度以降は芸能科という名称は公式には認めない。但し学内だけの慣用は関知しない。

その後の教授会において「昭和39年度にかぎり芸能・家政を中教のそれぞれの教科の乙課

程とし、書道は美術科の乙課程にふくめる。従来の中教音・美・体・家庭は甲課程とする」ことが決定された。なお、専門課程科目の履修単位に関しては、音楽科乙は48単位、音楽科甲は40単位であった(新潟大学1964, p.34)。さらに1964(昭和39)年度の概算要求として、音楽・美術・書道・体育の特別教科教員養成課程の新設を挙げたものの、大学本部との審議の段階で、まず音楽と書道を要求することになった。そして1965(昭和40)年度から音楽(30名)と書道(15名)の特別教科教員養成課程の設置が認められた。

2 芸能科のカリキュラム

1947(昭和22)年1月、文部省から師範学校長宛の通牒「学科課程案の研究について」には、以下のように記される(山田1971, p.224)。

従来この内容や運営の仕方までも、全国一律に文部省が決定し指示してきたのですが、民主主義の見地から考えて今後もそういう仕方によいでしょうか。

教育者がみずからの現場における経験に立脚し、深い反省の上に、これからの新しい社会が要求する最もよい教育はどのようにして作られるべきかについて全員協議を重ね、練り上げた案を文部省に提供し、文部省と全日本の現場人の衆知を集めておおまかながら国としての方針を立て、地方の実情に即するよう自由裁量の余地をできるだけ多くして運営のことは学校の自由と責任に委ねる方が实际的であり民主的でもあるのではないのでしょうか。

このように文部省は「地方の実情に即するよう自由裁量の余地をできるだけ多く」することを認めている。さらに「貴校独自の理想的な学科課程案を作っていただきたい」と続く(山田1971, p.224)。

芸能学科の教育目標は次のように示される(新潟大学教育学部高田分校1981, p.212)。

私共の目標とするところは、単に通常の芸術諸科の教員養成や、また旧制の音楽学校・美術学校のような単なる専門芸能人の養成でもありません。私共は、新しい大学教育の精神に即した新たな目標として、豊かな一般教養と共に、高度の専門的な技術と、専門分野に関する深い学識を兼ね具えた人物の養成を念願としております。現在のわが国において、音楽・美術・体育の諸分野における指導者として真に要求されているのは、蓋しこの種の人材であろうと考えられるからです。

『新潟大学便覧』には、単位の詳細については掲載されていない。1949(昭和24)年度では、4年課程が126単位以上、2年課程が64単位と規定される。1958(昭和33)年度には、4年課程124単位、2年課程68単位。表5に示した通り、2年課程が廃止された1959(昭和34)年度になると、表5の履修単位基準表が掲載され、140単位以上となる。

専門課程科目は50単位課せられている。新潟大学の中学校教育科の専門課程科目が40単位、教育職員免許法施行規則(以下、免許法と略記)における中学校教諭1級普通免許状ならびに高等学校教諭2級普通免許状の教科専門の最低修得単位数が32単位であるから、かなり

上乘せされている。ちなみに、大阪学芸大学の特別教科（音楽）教員養成課程の1954（昭和29）年度の音楽専門科目は62単位（上原1988, p.434）、東京芸術大学の1949（昭和24）年度の専門科目は84単位課せられていた（東京芸術大学2004, pp.70-73）。

1965（昭和40）年度になると、単位に関する記載がなくなる。また前述の通り、『新潟大学便覧』には、音楽に関する詳細な単位の内訳について記載がない。そこでここでは『新潟県上越音楽教育史資料』に掲載されている、1966（昭和41）年度の特別教科教員養成課程時代のカリキュラムを見てみたい（表6）。必修科目の中に「A：専攻声楽実習、B：専攻鍵盤楽器実習、C：専攻弦・管楽器実習、D：専攻作曲実習、E：専攻音楽学」と5専攻に2年次から分かれ、専攻ごとに指導が行われている。「声楽実習」「鍵盤楽器」の授業については、1年次から4年次まで必修とされ、専攻を問わず継続的に指導されている。

教職課程科目は、免許法では14単位でいいところ、20単位と多い。特に「教育実習」は2単位でいいところ、4単位も課せられている。1959（昭和34）年度以降は、2年次の観察・参加主体の2週間の実習と4年次の6週間の実習、全8週間の教育実習と非常に長い。1966（昭和41）年度からは、2年次3週間、4年次5週間に改められた。参考までに、1954（昭和29）年度の大阪学芸大学の特別教科（音楽）教員養成課程では、4年次に2単位課せられたに留まっていた（上原1988, p.434）⁴。新潟大学には附属高等学校はなく、新潟大学教育学部附属高田中学校（以下、附属高田中学校と略記）において教育実習が展開された。ただし、4年次の実習については、学生数や学生の希望によって、高等学校実習と中学校実習に分け、その一部を公立の高等学校や中学校においても実施した。1971（昭和46）年度からは、2年次は2週間、4年次は5週間、全7週間と1週間短くなる。4年次は全員が附属高田中学校で2週間、その後、A：高等学校、B：附属高田中学校、C：公立中学校の3コースに分かれて3週間の実習が展開される（新潟大学1980, p.376）。

2年次に教育実習が置かれている背景には、1958（昭和33）年度入学生以前は、2年課程もあり、分校修了後、小学校教諭ないしは中学校教諭の2級普通免許状を取得して修了する学生もいたことに起因する。

なお、芸能学科ということで、音楽・美術・書道・体育を融合した芸能学を扱った独自の授業は開講されていない。しかし、「教科教育法」を除く、「教職課程科目」は、芸能学科50名で受講することが多かったため、学生同士の交流はあった。

表5 芸能科・家政科履修単位基準表 1959（昭和34）年

		1年	2年	全学年	免許法
一般教育科目	人文科学系	8	12	12以上	12
	社会科学系	8	12	12以上	12
	自然科学系	8	12	12以上	12
外国語科目	第1外国語	4	8	8	
	第2外国語（独又は仏）	4	4	4	
保健体育科目	講義	2	2	2	
	実技	1	2	2	
専門教育科目	専門課程科目	10	50	50	32
	教職課程科目			20	14
	教育原理			4	3
	教育心理・青年心理		8	4	3

	教科教育法			4	3
	教育実習			4	2
	その他			4	
	選択科目			12	
卒業研究				6	
計		35	70	140	

出典 『新潟大学学生便覧昭和34年度』1959年, p.49。

表6 特別教科教員養成課程(1966)の科目

	授業科目	単位
必修科目	ソルフェージュ	2
	音楽通論	2
	声楽実習	8
	合唱実習	6
	鍵盤楽器	8
	合奏実習	2
	音楽史	2
	音楽理論	6
	指揮法	2
	A専攻声楽実習	各 12
	B専攻鍵盤楽器実習	
	C専攻弦・管楽器実習	
	D専攻作曲実習	
	E専攻音楽学	
	計	50
選択科目	合唱実習	4
	鍵盤楽器実習	4
	弦・管楽器実習	4
	打楽器実習	2
	合奏実習	6
	作曲実習	2
	指揮法	2
	音楽理論	16
	音楽美学	2
	音楽学演習	2
	音楽鑑賞の心理	2
	西洋音楽史	4
	東洋・日本音楽史	4
	音楽史演習	2
	音楽教育者研究	2
	オルフ研究	2
	芸術学入門	2

出典 『新潟県上越音楽教育史資料』1967年, p.168。

一般教育課程に関しては、当初第1学年及び第2学年において履修することを原則とし、第1学年では、新潟・新発田・長岡・高田のいずれかの地区で、第2学年以降においては、専門課程と併行して各学部所在地において履修するよう規定されていた。担当者は、各学部の教官が兼担で講義を行い、「一般教育委員会」が新設された(新潟大学1980, pp.929-933)。このように、当初の新潟大学においては、一般教育課程を旧制の新潟高等学校を母体とする人文学部、理学部教官のみが担当するのではなく、各学部において兼担するという特徴がみられた。

これが実現できた要因としては、教育学部にもかかわらず、教育学科に「人文科学・社会科学・自然科学」の講座が設置されていたからである。新潟大学教育学部は学芸学部と同様の役割を行っていた⁵。

1949（昭和24）年8月の一般教育委員会において、新潟地区以外の三地区では、教官が不足して計画通りの授業の実施が困難であるという実態が報告された。これを受け、教養課程の新潟に集中する提案が出された。しかし、三地区の猛反対を受け、結局1950（昭和25）年3月、一般教育課程の新潟集中と引き換えに、分校にある教育学部の現状維持を確約し、新潟に「一般教養部」が設置される。当初の一般教養部では、専任教官を置かず、人文学部と理学部の教官が中心となり授業を実施していた。なお、専任教官で組織される「教養部」が発足したのは、1962（昭和37）年である（新潟大学1974, pp. 164-165）。

1952（昭和27）年1月の評議会では、「新年度から高田・長岡・新発田各分校の芸能・家政・職業指導学科の最終学年を新潟へ移す」と決定した。これに対し、三分校の教授が強固に反対したため、結論は保留となった（新潟大学1974, pp. 172）。このような動向に対し、4月、「高田芸能学部期成同盟会」の結成大会が開かれ、さらに1953（昭和28）年3月には、衆参両議院の議長に芸能学部昇格を請願した（記念誌編集部1982, p.341）。金原省吾⁶高田分校主事は、1956（昭和31）年5月の『広報たかだ』において次のように訴える（記念誌編集部1982, p.343）。

高田分校の特色は、芸能学科のあることで、かかる芸能全般に関する学科を完全に持った教育機関は他に類がない。しかもこの科の成績は漸く充実して来て、美術では日展、二紀、二科、独立、春陽、一水、自由新創作等の日本一流の美術展覧会に在学中既に入選し入賞している。（中略）書道は日本書道協会学会には全員が入選し、特選までもとっている。（中略）音楽科も亦優秀な成績をあげている二十何年前から読売新聞が毎年音楽科を巣立つ新人のために開いて来た新人紹介演奏会でも、十分に水準を超え、音楽批評家の注目をひいている。体育科も各種の競技会、体育会、国民体育大会に出場して、それぞれ成績を認められている。ここに展覧会、競技会などの成績をあげたが、学校は何もそれを目的としている意味ではなくて、学校での教育の表現の一つの場として、例をとったにすぎないかくの如く芸能学科の教育は、幸にして充実して来ているが、新潟大学創立当時の特殊な事情によって、教育学部中に編入されているので、芸能学科としての十分な独自の構想を持つことが出来ず様々な制限をうけている。この点で学科を学部昇格し、芸能教育としての機能を充したいと思っている。（以下略）

以上、芸能科のカリキュラムは、専門課程科目、教職課程科目ともに、免許法を上乗せする単位が課され、長期間の教育実習も実施され、専門的な力量を兼ね備えた中等教員養成が展開されていた。また、発足当初、教育学部にもかかわらず、「人文科学・社会科学・自然科学」の講座を有していたこともあり、一般教育課程も担当していたという特徴が見られ、学芸学部と同様の役割を実施していた。

3 音楽環境

1) 施設・設備

新潟第二師範学校男子部の校舎が西城町、1947（昭和22）年に設置された女子部の校舎は本城町にある第十三師団司令部跡地及び建物を使用していた。男子部の校舎は、1935（昭和10）年の火災消失を受け、1938（昭和13）年に多額の寄付によって建設された鉄筋3階の校舎であった。講堂は1942（昭和17）年に完成した。それに対し、女子部の校舎は、1908（明治41）年の建造物のため古く、校舎の新築を計画し、芸能学科が使用する予定であった。しかし、戦災を受けた長岡分校の校舎が優先され、音楽科、図画科、工芸科、書道科の芸能学科は、女子部校舎を改装するに留まった。

音楽科は、建物の東側を使用した（図1）。1階には「合唱室」（図2）、2階には「鍵盤音楽研究室（ピアノ・チェンバロ）」（図3）があった。鍵盤楽器の設置状況については、表7に示した。旧倉倉が練習室として用いられ、防音はされず、真冬でも暖房が入らなかった。老朽化した校舎であったものの、事務職員の毎朝の清掃のおかげで、床の木目が数えられるほど磨きあげられ、美しい環境が保たれていた。

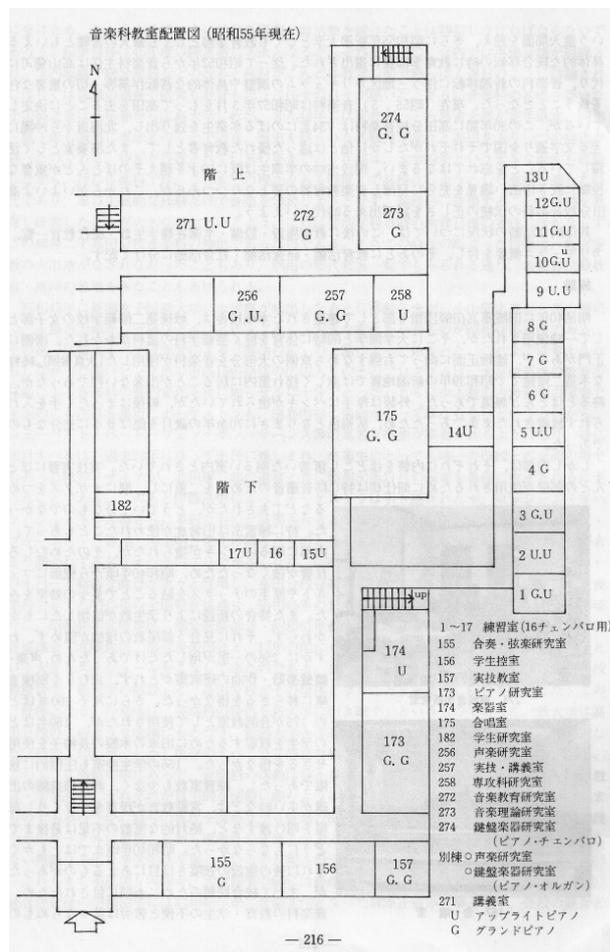


図1 音楽科教室配置図
出典 『高田分校三十年史』1981年, p.216。



157 合唱室

図2 合唱室

出典 『高田分校三十年史』1981年，p.215。



274 鍵盤音楽研究室

図3 鍵盤音楽研究室

出典 『高田分校三十年史』1981年，p.215。

表7 鍵盤楽器

年	鍵盤楽器
1949 (昭和 24)	G P, 1台 (257教室), 他はU P
1951 (昭和 26)	演奏会用としてG P購入 (講堂) →順次, 実技実習の教室にG P配備
1963 (昭和 38)	すべての研究室, 講堂, 実技実習教室にG P
1964 (昭和 39)	フルコンサートG P購入
1965 (昭和 40)	電子オルガン (F 1) が同窓会から寄贈
1968 (昭和 43)	G P購入
1975 (昭和 50)	チェンバロ, G P購入
1979 (昭和 54)	G P 28台, U P 36台。オルガン4台。チェンバロ3台, 電子ピアノ1台

出典 『高田分校三十年史』1981年，pp.217-218, 『新潟大学二十五年史部局編』1980年，pp.341-342 から作成。

2) 音楽教員

1943 (昭和 18) 年 4 月, 官立新潟第二師範学校へ昇格する。そのときの音楽科教員は, 石井信夫であった。石井は 1936 (昭和 11) 年 3 月, 東京音楽学校甲種師範科を卒業, 1938 (昭和 13) 年に着任し, 吹奏楽を熱心に指導する。石井は 1941 (昭和 16) 年に発足した「高田音楽協会」の役員 (指導者) も務める。高田音楽協会は「①音楽教育部②洋楽部③邦楽部」の三部門から組織され, 「②洋楽部」は「吹奏楽部, 弦楽部, 軽音楽部, 合唱部」から構成, 「吹奏

楽部」には、師範学校の吹奏楽部員も加わり、石井が指揮を行った（新潟県上越音楽教育研究会 1989, pp. 42-44）。

1943（昭和18）年11月6日、「新潟第二師範学校昇格記念式」が行われる。11月23日には「記念音楽会」が、声楽家の水谷俊夫（東京音楽学校本科声楽部1941年3月卒業）を招いて開催される。同時に「記念展覧会」も開かれ、書道、図画の各作品を展示する。

1944（昭和19）年3月、石井の転出に伴い、大給正夫（東京音楽学校甲種師範科1941年3月卒業）が富山県立魚津高等女学校（現、富山県立魚津高等学校）から異動する。学徒勤労員を受け師範学校の音楽の授業が十分実施できなくなった中、大町国民学校（現、上越市立大町小学校）訓導の吉田一郎と一緒に、1944（昭和19）年7月、「オリオンコール」と呼ばれる市民合唱団を組織する（新潟県上越音楽教育研究会 1967, pp. 95-96）。

1945（昭和20）年9月30日、第2学期の始業式とともに授業も再開される。戦前のピアノ検閲では、オルガンの教則本から始まって『バイエルピアノ教則本』、ソナチネ、チェルニーと段階を踏んで厳格に指導されていた。それに対し戦後では自由主義風潮を受け、教則本の指定もなく自由なものであった。

1946（昭和21）年6月30日、「第39回音楽演奏会」が行われ、従来の師範学校と附属小学校の共催ではなく、学生の手で自主的に進められる。師範学校生徒有志によって「アポロ合唱団」が結成され、「第39回音楽演奏会」にも出演する。

1947（昭和22）年10月22日の「第40回音楽演奏会」には、東京音楽学校教授の城多又兵衛（1904-1979）が賛助出演し、日本歌曲や『冬の旅』の独唱が加わる。この年、女子部が設置されたことにより、アポロ合唱団も混声となり、滝廉太郎（1879-1903）作曲の組歌「四季」から《雪》（中村秋香、作詞）、《月》（滝廉太郎、作詞）、《花》（武島羽衣、作詞）を披露する。

1947（昭和22）年3月、東京音楽学校師範科を卒業した篠原正敏が着任する。11月4日、石川師範学校において「北信5県師範学校音楽大会」が開催される。第1部では、吹奏楽で篠原の指揮で、スーザ（Sousa, John Philip, 1854-1932, 米）作曲《美中の美》、大給の指揮で、ポンテ作曲《天色の恩恵》を演奏する。第2部では、本科3年生がベートーヴェン（Beethoven, Ludwig van, 1770-1827）作曲「ピアノ・ソナタ第8番C《悲愴》」第1楽章をピアノ独奏する。岐路一行25名は、富山県魚川、西頸糸魚川、南魚六日町、中魚中仙田等で演奏会を行い、師範学校の音楽活動を披露する。

1948（昭和23）年には、福井県鯖江市において「第2回北信5県師範学校音楽大会」が開催され、吹奏楽と混声合唱で参加する（新潟県上越音楽教育研究会 1967, pp. 161-165）。

1948（昭和23）年10月9日、「創立五十周年記念式」が挙行される。記念行事として、記念講演会（9日）、教育研究協議会（10-11日）、記念仮装行列（10日）、記念展覧会（9-13日）、記念運動会（12日）、記念定期演奏会（12日）、記念芸能大会（13-14日）と続き、音楽・美術・工芸・書道・体育等の芸能関係の行事も展開される（記念誌編集部 1982, pp. 292-296）。

表8は、発足当初の新潟大学高田分校の音楽教員である。声楽と器楽の2講座からなり、新潟第二師範学校から、大給がピアノ、篠原が声楽として着任する。東京音楽学校助教授であつ

た伊藤武雄が1952（昭和27）年までというわずかな期間ではあるが、教授として在職している。ここで伊藤武雄について整理しておきたい（中曽根2001, pp.155-159）。伊藤武雄は1905（明治38）年、広島県にて誕生。1930（昭和5）年3月、東京音楽学校本科声楽部（バリトン）を卒業する。在学中は、澤崎定之、船橋栄吉、ネトケ・レーヴェに師事した。研究科に進学し、ヘルマン・ウーハペニツヒに師事する。1937（昭和12）年、日中戦争に召集され、伍長として上海で戦うものの、右手を失う（伊藤1940）。1940（昭和15）年、山田耕筰から依頼され、オペラ「夜明け」に出演する。当時、東京音楽学校助教授がオペラに出るということは学校も文部省も許さなかったため、退職して片手で出演した。1948（昭和23）年9月、斉藤秀雄（1902-1974）の発想により、「子供のための音楽教室」が開かれ、伊藤も協力する。

音楽学の専任教員は不在だが、芸術心理学教授の相沢陸奥男が「音楽心理」、物理学助教授の栗原正次（二師教授）が「音響学」、生物学講師の山岸光尚（二師教授）が「音楽概論」を担当している。さらに特別教科教員養成課程となる1965（昭和40）年度以降は非常勤講師として、「西洋音楽史」に服部幸三（1924-2009）、東川清一（1930- ）、「音楽美学」に野村良夫（1908-1994）、「作曲」に阿部幸明（1911-2006）等著名人が加わり、音楽学、作曲関係の授業の充実が図られている⁷（新潟大学教育学部高田分校1981, p.211）。

選択科目の中には、「オルフ研究」（小山郁之進、篠原正敏担当）や「わらべうた研究」（篠原正敏担当）の授業も開講されていた。「わらべうた研究」が設置されている背景には、わらべうたを正しくうたえる教員を養成したいという願いがある。篠原は「子どもを本当に愛する音楽教育ということを考えると、チェルニーのようなものをただ積み重ねていくようなことが本当の音楽教育とは考えられない。子どもの世代にとって母乳のようなもの、もっと生活に密着した音楽の姿というものがあるんじゃないかと。それが「わらべうた」という表現につながるわけです。そういった、生活にあった教材をどのように見極めて子どもに与えていくかということ、よく考えられるような学生像を期待しています」と語る（木村1977, p.19）。その他、新潟大学高田分校は1954（昭和29）年、高田瞽女⁸の瞽女唄の収録も試みる（上越市立総合博物館2013, p.45）。

小山郁之進は次のように、演奏だけではなく、音楽学や音楽教育学の重要性を述べる（小山1966, p.72）。

個人の教師のもとで声楽、鍵盤楽器、弦などやさらに作曲を実習するにとどまらないで、大学ではもっとユニヴァーサルな音楽学的視野で、音楽を単にステージやコンサートホールのものであるという考えから心を転じ、いわば「自己を開発する教育」とすることは、人を指導するものの道であろうと思う。今日の音楽教育は人間全体と向きあっている。

表8 音楽教員

氏名	職階	着任年	専門	備考
篠原正敏	助手	1949（昭和24）	声楽	二師教官
宝井真一	助教授	1949（昭和24）	声楽	
伊藤武雄	教授	1950（昭和25）	声楽	
大給正夫	助教授	1949（昭和24）	器楽	二師教授
小山郁之進	助教授	1950（昭和25）	器楽	

出典 『新潟大学便覧昭和24年度』1949年, pp.142-143, p.219, 『新潟大学二十五年史総編』1974年, p.117, 『新潟大学二十五年史部局編』1980年, p.318, 『高田分校三十年史』1981年から作成。

3) 演奏会

1949(昭和24)年10月16日には、下記(図4)の内容で「開学記念演奏会」が催された(記念誌編集部1982, pp. 353-354)。

- ・バリトン独唱＝篠原正敏, 宝井真一
- ・ソプラノ独唱＝井崎嘉代子
- ・混声合唱＝高田分校合唱団
- ・ピアノ独奏＝大給正夫
- ・二重唱＝井崎嘉代子・宝井真一

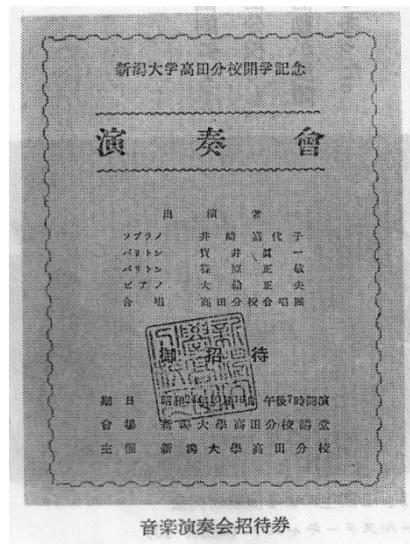


図4 開学記念演奏会

出典 『公孫樹下の八十年』1982年, p. 353。

1953(昭和28)年11月15日、「第1回メサイア演奏会」が開かれる(図5)(新潟大学教育学部高田分校1981, p. 225-226)。1954(昭和29)年3月に芸能学科を卒業した小川文勝は次のように回想する(新潟大学高田分校1981, p.64)。

「ヨーロッパの街々に枯葉が舞う頃になると、救世主(メサイア)の公告が一斉に張り出されるのです」山岸光尚先生のこんなお話を皮切りに、昭和28年11月15日、第1回の公演が行われました。その時は日本語で第二部までの抜粋でしたが、前年の暮れに赴任された三瓶十郎先生の指揮のもと分校講堂にオケ伴のハレルヤが初めて響き渡ったのでした。

当時は男声が圧倒的多数で、いかにして女声を確保するかが問題で、メサイア以前は北城高の女学生の応援を求めたりしたものでした。28年となると、新制大学の全学年が揃って2年目であり、メサイアの幕あけは、分校の充実を象徴する重要な意味があったともいえましよう。



図5 第1回メサイア演奏会
出典 『高田分校三十年史』1981年，p.64。

当初，年1回春に開催されていた「定期演奏会」は，1951（昭和26）年からは，原則として6月初旬と11月初旬の年2回公演するようになる。同年には，学生の演奏研修発表の場として「学生研究演奏会」も開始される（新潟大学教育学部高田分校1981，p.222-223）。

「卒業演奏会」は1953（昭和28）年3月が第1回で，以降継続される。1955（昭和30）年に限っては，音楽だけではなく，絵画・彫塑・書道の各科が一体となった合同発表会を新潟市公会堂・大和ホールで開き，芸能学科の特性を生かした発表が行われる（新潟大学教育学部高田分校1981，p.227）。

1956（昭和31）年以降は「弦楽演奏会」（1966年以降は「オーケストラ演奏会」と名称変更），1962（昭和37）年以降は「部会発表会」というピアノ・声楽・弦楽の各部会の演奏発表の場が設けられる（新潟県上越音楽教育研究会1989，pp.119-123）。

一方，卒業演奏だけではなく，卒業論文も課せられ，「卒業論文要旨発表会」も行われる（新潟大学高田分校1981，p.227）⁹。この点が音楽大学と異なる。

おわりに

本稿で明らかになったのは，以下の点である。

第一に，当初の計画では人文学部に置かれていた「芸能学科」は，教育学部に位置付けられ，1959（昭和34）年度に「芸能科」，1964（昭和39）年度に「中学校教育科乙」，1965（昭和40）年度に「特別教科教員養成課程」と改組される。芸能学科新設には，新潟第二師範学校長であった内山良男の元進められ，地元の教育行政の要望もあり，実現した。

第二に，新潟大学の音楽の専門課程科目は，免許法では32単位でよいところ，50単位と多く課せられ，「声楽，鍵盤楽器，弦・管楽器，作曲，音楽学」の専攻に分かれての指導が展開された。また，教職課程科目に関しては，免許法では14単位でよいところ，20単位課せられていた。中でも「教育実習」は，4単位と長期間課せられ，高等学校においても実施されていた。

第三に，第十三師団司令部建物が，芸能学科の校舎として使用された。戦前の新潟第二師範学校の音楽教員の大給正夫，戦後の新潟第二師範学校に採用された篠原正敏の2名とも，新潟大学の教員になっている。さらに3名の教員が新規に採用され，1950（昭和25）年の時点で5名の専任教員で組織された。その中には声楽の伊藤武雄も含まれる。

第四に，新潟第二師範学校の音楽教員の大給正夫が中心となり，「オリオンコール」と呼ばれる市民合唱団が組織され，音楽活動が盛んであった。新潟大学昇格後においても「メサイア

演奏会」「定期演奏会」「卒業演奏会」「弦楽演奏会」等が定期的に開催され、地域の音楽文化への啓蒙が図られていた。

ところで上原の1976(昭和49)年時点での調査によると、新潟大学特別教科教員養成課程の教職(高校、中学、小学校専科および非常勤講師を含む)への就職は、50%であった(上原1976, p.77)。今後、高等学校教員養成という本来の目的をどの程度達成していたかについて、当時の学生の意識と関連付けながら、調査を深めていきたい。さらに他の地域の特別教科教員養成課程との比較を通して、戦後の音楽教員養成の実態について明らかにしていきたい(鈴木2020, pp.39-58)。

鈴木慎一郎(鳥取大学地域学部)

【謝辞】

本稿を作成するにあたり、上越教育大学名誉教授の山形忠顕先生、村山和夫先生(新潟大学高田分校1951年終了)、松沢秀介先生(新潟大学高田分校1969年卒業)ならびに上越教育大学附属小学校、上越教育大学附属中学校、新潟大学教育学部教務係から資料の提供を得ました。ここに記して感謝の意を表します。

2022(令和4)年10月8日(土)から12月18日(日)まで、小林古徑記念美術館において「芸能科の記憶：学び舎から飛び立った作家たち」が開催されました。

【付記】

本稿は日本音楽教育学会第44回大会(2013年10月、於：弘前大学)における口頭発表の内容を発展させたものである。

本研究は JSPS 科研費 24730755 の助成を受けた。

【引用文献】

伊藤武雄(1940)『左手の書』萬里閣。

上原一馬(1972)「第三章第1節第6項 教員養成大学音楽科の教育課程」教員養成学部教官研究会音楽科教育部会『音楽科教育の研究』東京書籍。

上原一馬(1976)「特別教科(音楽)教員養成課程の実情：その問題点と改善策」『季刊音楽教育研究』第19巻第2号、音楽之友社。

上原一馬(1988)『日本音楽教育文化史』音楽之友社。

金沢大学50年史編纂委員会(1999)『金沢大学50年史 部局編』金沢大学創立50周年記念事業後援会。

喜多村和之(1977)「第Ⅱ部第2章 戦後の学制改革と設置認可行政」天城勲・慶伊富長編『大学設置基準の研究』東京大学出版会。

木村博恵編(1977)「キャンパス拝見⑨新潟大学高田分校」『ピアノの本』11号、草思社。

記念誌編集部編(1982)『公孫樹下の八十年』。

雲尾周(2001)「第Ⅲ部第5章 1960年代における旧師範学校系大学の展開過程」T E E S研究会編『大学における教員養成』の歴史的研究：戦後「教育学部」史研究』学文社。

- 公孫会同窓会（1951）『公孫樹下の五十年』.
- 小山郁之進（1966）「教育方針 新理念の教育」『音楽大学・学校案内 昭和42年度』音楽之友社.
- 榊原禎宏（2001）「第Ⅱ部第1章 旧師範学校系大学における「教育学部」の成立」T E E S 研究会編『「大学における教員養成」の歴史的研究：戦後「教育学部」史研究』学文社.
- 上越市立総合博物館（2013）『高田警女最後の親方 杉本キクイ』.
- 鈴木慎一郎（2003）「高等師範学校，女子高等師範学校における音楽教員養成：東京女子高等師範学校，広島女子高等師範学校での「体育・音楽教員養成」を中心として」『関西楽理研究』20号，関西楽理研究会.
- 鈴木慎一郎（2006）「戦前における音楽教員養成の独自性：美術・体育との比較から」『芸術教育実践学』第7号，芸術教育実践学会.
- 鈴木慎一郎（2019）「音楽教員養成史の研究動向と課題」日本音楽教育学会編『音楽教育研究ハンドブック』音楽之友社.
- 鈴木慎一郎（2020）「特別教科（音楽）教員養成課程による地方への音楽教員養成拡大：新制大学への再編の中で」『教育研究論集』第10号，鳥取大学.
- 高田市史編さん委員会編（1980）『高田市史』第3巻.
- 寺崎昌男（1971）「第一章第四節 教育刷新委員会における制度改革の論議」海後宗臣編『教員養成』東京大学出版会.
- 寺崎昌男（1971）「第二章 大学における教員養成の出発」海後宗臣編『教員養成』東京大学出版会.
- 東京芸術大学百年史編集委員会編（2004）『東京芸術大学百年史 音楽学部篇』音楽之友社.
- 東京国立文化財研究所編（1960）『日本美術年鑑』昭和34年版.
- 仲新（1969）『教育学叢書第1巻・日本現代教育史』第一法規出版.
- 中曽根松衛（2001）『音楽界戦後50年の歩み：事件史と音楽家列傳』芸術現代社.
- 新潟県上越音楽教育研究会（1967）『新潟県上越音楽教育史資料』.
- 新潟県上越音楽教育研究会（1989）『上越音楽教育史』.
- 新潟大学（1949）『新潟大学便覧昭和24年度』.
- 新潟大学（1964）『新潟大学学生便覧昭和39年度』.
- 新潟大学教育学部高田分校（1981）『高田分校三十年史』.
- 新潟大学二十五年史編集委員会編（1974）『新潟大学二十五年史 総編』.
- 新潟大学二十五年史編集委員会編（1980）『新潟大学二十五年史 部局編』.
- 野村良雄（1965）『音楽教育学とは』音楽之友社.
- 林三平（1971）「第四章 教育職員免許法の成立と実施」海後宗臣編『教員養成』東京大学出版会.
- 林三平（1971）「第六章第一節 制度転換期における教員養成の実施状況と再編成構想」海後宗臣編『教員養成』東京大学出版会.
- 船寄俊雄（2005）「資料編」船寄俊雄・無試験検定研究会編『近代日本中等教員養成に果たした私学の役割に関する歴史的研究』学文社.
- 山崎奈々絵（2017）『戦後教員養成改革と「教養教育」』六花出版.
- 山田昇（1971）「第三章 学科課程の改革」海後宗臣編『教員養成』東京大学出版会.

山田昇 (1971) 「第六章第四節 再編成の施策と諸動向」海後宗臣編『教員養成』東京大学出版会。

山田昇 (1979) 「第二編第二章五 教員養成系大学・学部の実状と問題」仲新監修『学校の歴史 第5巻 教員養成の歴史』第一法規出版。

山田昇 (1993) 『戦後日本教員養成史研究』風間書房。

(1963) 「明年から芸能科廃止」『新潟日報』9月26日。

【注】

¹ 大学設置委員会は1948(昭和23)年9月、「小学校教員養成最低基準(案)」、「中学校教員養成最低基準(案)」を作成した。これらは教員免許状取得に必要な単位を卒業に必要な単位と重ねていた(山崎2017, p.160)

² 東京芸術大学では、1952(昭和27)年度、1953(昭和28)年度は入学生がいなかった(鈴木2020, p.44)。

³ その後、特別教科(音楽)教員養成課程は、山形大学、島根大学、宮崎大学、北海道学芸大学、愛媛大学、東京学芸大学、新潟大学に増設された。美術・工芸に関しては、岡山大学、佐賀大学、岩手大学、北海道学芸大学、東京学芸大学、高知大学に増設された。

書道に関しては、奈良学芸大学、福岡学芸大学、新潟大学、愛知教育大学に増設された。

保健体育に関しては、福島大学、鹿児島大学、広島大学、京都学芸大学、高知大学、福岡学芸大学、島根大学に増設された(雲尾2001, p.377)。

⁴ 上原は「大阪教育大学ではこの課程の教育実習を2週間(2単位)しか実施していないが、他の課程同様少なくとも5週間(4単位)程度実施しなければ実習の効果を十分あげることができないだろう」と言及する(上原1972, p.193)。

⁵ 信州大学に関しても、松本高等学校が文理学部、長野師範学校と長野青年師範学校が教育学部として発足した。しかしながら、教育学部は同学部、工学部および繊維学部の一部の一般教育科目を担当した。さらに、教育学部では、教科の専門科目のすべてを開講する構想をもっていた(榎原2001, pp.187-188)。

⁶ 金原省吾は1888(明治21)年、長野県で生誕。1911(明治43)年、長野県師範学校を卒業後、1913(大正2)年、早稲田大学予科に入学、1917(大正6)年、早稲田大学文学部哲学科を卒業後、研究科に進学。1929(昭和4)年、帝国美術学校(現、武蔵野美術大学)教授となり、1941(昭和16)年から1943(昭和18)年までは、建国大学教授となる。1949(昭和24)年、新潟大学教授に着任。1958(昭和33)年、逝去(東京国立文化財研究所1960, p.152)。

⁷ 野村は音楽学関係の授業に関して「新潟大学教育学部なども充実を計画中ときいている」と言及する(野村1965, p.83)。

⁸ 瞽女は盲目の女性旅芸人で、三味線を弾いて唄をうたい、村々をまわって暮らしていた(上越市立総合博物館2013, p.6)。

⁹ 特別教科(音楽)教員養成課程の卒業論文に関して、演奏をもって論文に代えていたのは、東京学芸大学、大阪教育大学、島根大学、愛媛大学であった。論文と演奏を併用していたのは、山形大学、新潟大学、宮崎大学であった(上原1976, p.77)。